



# 「封印切」に就いて

千葉新七

(三)

文化二年の重太夫改染太夫の「新町の段」は、多分近松の方であらうと推察したが偶然、上野の帝國圖書館所藏の「操番付」合綴二冊にあつた。はたして推定通りでした。人形の役割は「前」「千本櫻」「切」【龜屋忠兵衛】「榎屋梅川契情戀飛脚」と別々になつて居りますから必要な梅忠の方のみ掲げます。

尙、年表には重太夫改染太夫となつてゐますが、該番付には重太夫事染太夫とあります。

## 戀

の

|          |       |
|----------|-------|
| 忠三女房     | 豊松重三郎 |
| 忠兵衛      | 吉田 文三 |
| 八右衛門     | 吉田大五郎 |
| けいせいいたかせ | 吉田 平藏 |

ひ き や く

|         |       |
|---------|-------|
| どうあん    | 吉田 晋市 |
| じゆんれい   | 吉田 晋市 |
| おんきよ    | 吉田千四郎 |
| かむろ     | 吉田千次郎 |
| くはしやきよ  | 吉田才九郎 |
| 傳がばば    | 豊松 源藏 |
| 五兵衛     | 豊松 源藏 |
| けいせい鳴戸瀬 | 吉田東五郎 |
| 梅 川     | 吉田 虎藏 |
| 孫右衛門    | 吉田晋五郎 |

(この内、けいせいいたかせのたかは文字が擦れて判讀仕難く、ちよとせとも思ひましたが、いづれにしても近松の方の女郎の名です。)

巡禮とあるのは新口村の端場に出る役名でせう。これで御分りになると思うが「近松」の「封印切」に「專助」の「新口村」を附けた形式は知れた範圍では之を嚆矢と看做してよいでせう。

吉田虎藏は「千本」では、靜とこせんを使い、東五郎は若葉の内侍を使つた。年表に洩れてゐるから補つておきます。

けいせいに誠なしの件りは鳴戸潮あたりが引いたのでは此の時は、なかつたかと想像する。文政三年の「冥途の飛脚」は淡路町からで、今日上演の體裁になつたと思はれます。もつとも今日では出ぬ道行が「新町」と新口村の間にある、

近松の儘の——文句は同じで——とはいへぬも朱が残り傳存した。染太夫が語出してから「封印切」は時折上演されるやうになつたものらしい。併し、染太夫風と簡単に片付けてしまふ譯にはゆかぬであらう。今日では染太夫風で語る太夫もあらうし、團平の話から推して此太夫風でやる太夫もあらうし、本場の大阪以外の土地に、京都、名古屋、東京、九州西國には大阪で手を入れぬ古風な型が傳存してゐるかも知れない。各派を比較して見たら面白い事だらう。全然、語口や三味線の手や息合が文樂のと違ふからと云つて、文樂を絶對的なものとして改めるのは如何かと思ふ。正徳より文に年間迄、殊に寶曆前後には川演の寄物を一の外國でやつた。贅へば、「色揃身振操」は戀女房（東山、四條河原）・國姓爺（二

ノ切、三ノ切）・夕霧阿波の鳴渡（揚屋）・娘景清（三ノ口、切）の寄物である。年代未詳、京都蛭屋吉兵衛が名代座本である。阿波の大盡の人影があるので外題通り近松の作でせうか、夕霧・伊左衛門の様子を見て立腹の圖がある。寶曆十一年の竹本座（夜芝居 人形顔見世 冬籠難波梅）の外題で、安治川橋、信州川中島、道風別れ、三浦二ツ胴、薄雪湯かげん、國姓爺九仙山、いとまごひ四季の放下僧の寄物であつた。内容の分らぬ寄物集——番附未見の爲に——安永三年の「役者評判身振操」（前記「色揃」との關係不明）、寶曆十三年の「御前縣淨瑠璃相撲」の如きものもありますので、絶對に正徳から文化迄の間に上演せずとは言ひ切れませう。あり得るかも知れないし、上演の都度の全部や記録が残つて居ぬと思はれる今日、又江戸、京都、名古屋其他の郷土化したとはいへ、義太夫での操りが全國に撒布されて、地方では時代物が主ですが稀らしい外題が出るようですから、俄に、出た事がないとは云ひ得ますまい。二ツ胴の淨瑠璃ですが「石切堀原」で通つてゐますが、享保十五年に書卸され前記、「難波梅」（寶曆十一年より、寄物の時は別として、天保十一年に、三浦大助紅梅約一春野家有齋・山田案山子添削として久振りに出しました番附面ですが、二ツ胴の件りは其の儘で前後を増補したやうです。嘉永二年の西澤・鳳の「傳奇作者拾遺」に依ると二ツ胴の件りにですが

「——三十年前に——（文政初）北の素人淨瑠璃に名高き吹松獨是を語り予も幼少の折聴し事あり。」

とあります。夫れ故、譬へ上演は稀でも曲は傳はつてゐるのがありますし、稽古に出ぬも朱と云ふものがあるのですから、一流の人を抱えてゐる文樂庵——松竹——あたりでは「山良湊」の鶴娘が増補されて、手付を新にしたとか聞きましたが一しろと——せよの意味なり云ふ方は素人ですから無理な注文も出ますが、する側はおいそれと引受るのは如何なもの、鶴娘などは流行つた物ですから、無闇な事をせず、紋下と相談して、紋下は、太夫や三味線に若しなうしたら朱の韓旋やせて稽古に立合ふ位な熱心がなければいけません。自分一人は熱心に研究されて語つてゐるやうですが他の人達の面倒を見たり向上熱を見習はせるやうにならなければまだ本當の紋下とは云へますまい。とんだ所へそれでしたが「山良港」でも「扇橋」「山別れ」「鶴娘」はよい所ですから其の儘にして、前後が全然、廢曲になつてしまつたのなら、止むを得ませんから原作の儘では種々事情の爲不可能と云ふのなら

## 梅・忠主 上演年表

（海音作等不必要分は省略す）

正徳元年三月五日

「前」新いるは物語

竹本座

「切」梅 忠兵衛 其途の飛脚

竹本 筑後 稼

書卸なるも役割未詳

安永二年十二月廿三日

けいせい戀飛脚

曾根崎新地芝居

豊竹此太夫

書卸なるも役割未詳

茲に於て始めて添削して手付をしたらよいでせう。天保の二ツ胴」の添削はそうであらうと思ひます。それで此の「封印切」も二ツ胴のやうにそんな工合で傳存してたのかとも思はれます。併し榮太夫は此の淨瑠璃を流行らせた太夫であると申しても過言ではないでせう。五行本の節付が丸本と異なるので五行本の初版本が発見されれば幾分年代が判然するだらうし又、五行にする時文句かいつそ變へてくれれば人目に立つのでせうが、根が驅落者の淨瑠璃故、近松だけの情のある文が書けないので、其の儘くの方が今日には有難く頂戴、五行本の節付が分ると面白く、明和 寛政頃の「封印切」が親はれ、五行本の如きは年代的文化年度からでせうか、どんなものでせう。外題としても前記の次第故、一口には梅忠も「冥途の飛脚」とも「傾城戀飛脚」と二つ名では取りかね「戀飛脚大和往來」と三種にもなるので、踏みはずとお先きまつくらず山の谷底へ落る生兵法の一書き知り得た事だけ申し加えました。（終り）（昭和一七、九、一五）

文化二年九月九日

「前」義經千本櫻  
「切」龜屋忠兵衛契情戀飛脚

大西芝居  
豊竹麓太夫

新町

重太夫事

竹本秀太夫  
竹本秀太夫  
竹本秀太夫

文化十三年七月廿九日

三日太平記  
傾城戀飛脚  
迎龍死期曲染  
新うすゆき物語

天満天神境内  
名代龜谷佐佐  
竹本土佐太夫

新町  
新口村

竹本富太夫  
竹本富太夫  
竹本富太夫

文政三年五月十五日

楠昔  
梅川冥途の飛脚  
忠兵衛

稻荷境内  
太夫本木々太夫  
竹本木々太夫

飛脚屋  
道新行町

竹本染太夫  
竹本染太夫  
竹本染太夫

天保元年閏三月

鎌倉三代記  
男作五雁金  
戀飛脚大和往來  
義仲勤功記  
鳴神不動北山櫻

北堀江市之側  
太夫本  
鶴澤福造

新口村

竹本氏太夫  
竹本氏太夫  
竹本氏太夫

天保三年五月十九日

日吉丸雅櫻  
梅野迎駕籠死期曲染  
忠兵衛  
梅川戀飛脚大和往來  
忠兵衛

稻荷境内  
太夫本木々太夫  
竹本木々太夫

飛脚屋  
新口村

竹本谷太夫  
竹本谷太夫  
竹本谷太夫

天保七年三月廿七日

近江源氏先陣館  
傾城戀飛脚

稻荷境内  
名代  
榊屋五兵衛

飛脚屋  
新口村

竹本長門太夫  
竹本長門太夫  
竹本長門太夫

弘化三年九月

小野道風青柳硯  
生寫朝顔話  
戀飛脚大和往來

竹田芝居  
太夫本網太夫  
竹本網太夫

飛脚屋  
新口村

竹本越太夫  
竹本越太夫  
竹本越太夫

道の行段

ツツワシ切口  
竹本久我太夫  
竹本久我太夫  
竹本久我太夫

(竹本久我大夫とは同じか)

(大切に道行をつけた例大切の初渡が不明)

(今日の體裁但し戀飛脚の外)

(大和往來で飛脚屋と新町を)

(大和往來の外題を始めて使用)

(傾城戀飛脚の外題を始めて使用)